2020年5月31日（日）久宝教会　ペンテコステ（聖霊降臨日）礼拝
メッセージ「息は頂きもの」　　牛田 匡 牧師

聖書　ヨハネによる福音書　14章15－26節

今日は「ペンテコステ」です。週報には「聖霊降臨日」とも書いてありますが、弟子たちが集まっていた所に聖霊が降り、教会が始まった日として、「教会の誕生日」と呼ばれることもあります。キリスト教では、イエス様がお生まれになった「クリスマス」と、イエス様が死から引き起こされた「イースター」、そして聖霊が降って教会が生まれた「ペンテコステ」の三つが、三大祝日となっています。とは言え、今年のペンテコステはこのように、皆で集まることができないという、例年とは異なる形での礼拝となっています。「ペンテコステ」というのは、ギリシャ語で「50番目」という意味の言葉です。もともとは小麦の収穫時期に行われる「七週祭」と呼ばれるユダヤ教のお祭りでしたが、7日間×7週間で49日、その翌日で50日目ということで「五旬祭」とも言われていました。そのお祭りの日に、弟子たちの上に「聖霊」が降り「教会」が始まったと伝えられています。それは丁度、イエス様の死からの引き起こしがあったイースターから50日目であったと言われています。

では、「聖霊」とは一体どのようなものだったのでしょうか。そのようなことを考えると、つい「聖霊」を受けると、何か特別なことができるようになって、特別な力が湧いてくる、というようなことを考えがちですが、「聖霊」は目に見えませんし、触れませんので、よく分からないというのが、正直なところです。先程歌った2曲の賛美歌もそうでしたが、かつて2000年前に弟子たちの所に降ったように、今も私たちの所に降って来て下さいというお祈りが、教会の中では伝統的に続けられて来ています。しかし、それでは「聖霊」とは、特別なお祈りによって、特別な時にだけ降って来て、私たちに普段とは違う特別なことをさせるような特別な存在なのでしょうか。どうでしょうか。

漢字で「聖霊」と書かれている言葉は、元々のギリシャ語では「聖なる」の字が付かない「霊」という言葉もありますが、「霊・たましい」という意味の他にも「風」や「息」という意味も持っている言葉です。風も息も無色透明なので目には見えませんが、確かに在るものとして、私たちはその存在を肌で感じたり、体験したりすることができます。「霊」も同じように、目には見えないけれども、その「霊の力」「霊の働き」を私たちは様々な形で体験することができる……。古代の人たちのそのような理解が、そこには込められているのかもしれません。

聖書の冒頭『創世記』には、神様がこの世界をどのように創られたかの神話が記されています。その創造神話によると、神様は「土の塵で人

を形づくり、その鼻に命の息を吹き込まれた。人はこうして生きる者となった」（創 2：7）と伝えられています。確かに古代日本語であるやまとことばでも、呼吸の「息」と「生きる」の「生き」は同じ言葉ですし、呼吸が止まって死ぬことを「息を引き取る」とも言いますから、神様から「命の息を吹き込まれて生きる」というのは、時代も場所も越えて、人類に共通する感覚なのかもしれません。

私たちは「命には限りがあり、死なない人はいない」ということを、頭では分かっていても、普段はそんなことは考えずに、生きていることが当たり前で、また次の日が当たり前に来ると思って過ごしている人が大半ではないかと思います。しかし、そんな私たちの日常に時折、くさびが打ち込まれます。大地震や台風などの災害や、紛争や戦争などがそうですし、また今回の新型コロナウイルスという病気がそうでした。今から 3 ヵ月前、今年の 2 月の段階では、日本や世界がこんな状況になるということは、ほとんどの人が考えていなかったのではないでしょうか。「日々、ものすごいスピードで回り続けるグローバル経済の歯車を、止めることは誰も出来ない……」多くの人々が、そう考えていましたが、コロナがそれを止めました。お店も工場も学校も、閉まりました。それまで当たり前と思っていたものが、当たり前で無くなっていく……。その背景には、未知のウイルスから「命を守る」「経済より命を優先する」という考えがありました。今回のコロナによって、多くの人がそれまで当たり前と思っていた「命」というものに、改めて向き直す機会が与えられたのではないでしょうか。「命」や「息」というものは、どこから与えられているのか。またそれらは誰のものなのか……。

「経済よりも命を優先する」という国の姿勢は、これまでの「命よりも何よりも経済優先」という姿勢からすると、歓迎すべきことのように思えましたが、3 ヵ月が過ぎた今、経済的に立ち行かなくなり、生活できなくなっている人たちが、増えて来ています。この問題は「命か経済か、どちらが大切か」ではなくて、「命も経済も、どちらも大切」にしないと、乗り切ることができません。何故なら、経済活動は人々の生活、命に直結しているからです。

先週、日曜日の礼拝の後、教会で作ったおにぎりを釜ヶ崎のいこい食堂に届けて来ました。炊き出しに並ばれる方の人数も、コロナによる失業の影響か、最近では再び増えて来ているとも伺っていましたが、今回は 100 人以上の方が列に並ばれて、お一人お一人におにぎりをお渡ししました。私はそれぞれの方のお名前も知らなければ、今どのような状況におられるのかも知らないのですが、それぞれの事情がおありなのでしょう。用意したおにぎりは、あっと言う間に配り終えましたが、そ

のような炊き出しで食いつなぎ、その日その日の命をつないでいる方がおられるということを思うと、「コロナで大変」と言いながらも、三食食べられている私たちは、胸に痛みを覚えずにはいられませんでした。そのような方々のことも覚えながら、神様からの命の息、聖霊は、どこにどのように注がれるのかについて、聖書から読んでみたいと思います。

今回の聖書の箇所は『ヨハネによる福音書』の中から、聖書協会共同訳聖書では「聖霊を与える約束」という小見出しが付けられている箇所でした。逮捕され十字架につけられる前、イエス様と弟子たちとの最後の晩餐の場面で、イエス様が弟子たちに話された話の一部分となっています。キリスト教の伝統的な理解では、「ここでイエス様は自分が去った後に、自分の代わりに聖霊を与える約束をして、その聖霊が与えられたのがペンテコステの日でした」というわけですが、この箇所を丁寧に読むと、そういうわけでもないように思えてきます。

16 節には「私は父にお願いしよう。父はもうひとりの弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる」とありますが、ここで「弁護者」と訳されている言葉は、別の翻訳では「助け手」です。裁判の場面での「助け手」として「弁護者」を表わす際にも使われているので、ここではそのように訳されていますが、必ずしもその意味だけに限定されているわけではありません。「もう一人の」というのは、これから弟子たちの前から去っていくイエス様とは「別にもう一人」という意味です。ですから、イエス様は自分に代わって永遠にあなたがたと一緒にいる「助け手」を父なる神にお願いしようと言われているわけです。

続く 17 節によると、その「助け手」とは、「真理の霊」、即ち「聖霊」だということが分かります。更に「あなたがたは、この霊を知っている。この霊があなたがたのもとにおり、これからも、あなたがたの内にいるからである」とまで書かれています。言い換えるならば、「イエス様がいなくなった後に、しばらくしてから聖霊が与えられる」のではなく、「その聖霊について、あなた方は今もう既に知っているでしょ。今までも、そしてこれからも、ずっとあなた方の内にいるでしょ」ということでしょう。「霊」という言葉が、「息」という言葉と同じだということからも、この「聖霊」は私たちの息の中に、その命の中に共に在るものだということが分かります。

更に 18 節「私は、あなたがたをみなしごにはしておかない」、19 節「私が生きているので、あなたがたも生きることになる」、20 節「私が

父の内におり、あなたがたが私の内におり、私があなたがたの内にいることが、あなたがたに分かる」というイエス様の一連の言葉からもまた、私たち全ての人たちの命の中に永遠に共におられる神、聖霊の存在を知ることができます。しかし、17 節にあるように、その霊を見ようとも知ろうともしなければ、たとえそれが自分と共にいても、その存在を認めて、それに気付くことはできないのでしょう。

釜ヶ崎でのおにぎり配りの際、「お一人お一つずつです」と言い、あらかじめお渡ししていた番号札の順番で、おにぎりをお渡ししていきました。中には「二つ目はもらえないの？」と聞いて来られる方もおられ、こちらも「すみません。一つずつなんです」と頭を下げるわけですが、見ていると、自分がもらったおにぎりをすぐに他の人に渡している人もおられました。そのお二人の間で、事前にどんなやり取りがあったのかは分かりませんが、今少しでも、より困っている方に渡されたのかもしれません。生活にゆとりのある人は、ドヤ街の炊き出しには並びません。自分もその列に並びながら、なおかつ隣の仲間のことを「放っとかれへんな」といって、誰に見られるでもなく自然に行動すること。聖霊の働き、いつも共にある命の神の霊の働きというものは、そういうものではないでしょうか。何も天変地異や華々しい奇跡を伴った仰々しい特別なものなのではなく、風が音もなく吹き抜けるように、そっと自然に様々な境界線を越えていくもの、私たちの周りに張り巡らされているバリア（障壁）を越えさせてくれるもの、それが聖霊の働きなのではないかと思います。

十字架での死から引き起こされたイエス様が「聖霊を受けなさい」と言ったのは、弟子たちがイエス様というリーダー、導き手を失って路頭に迷い、反対者たちを恐れて扉に閂をかけ、家の中に閉じこもって恐怖に震えていた場面でした。またペンテコステの出来事も、弾圧の中の怯えていた弟子たちの小さな群れに聖霊が注がれたという出来事でした。

私たちの暮らしの中では、遠い昔の出来事に限らなくても、「神は死んだのか」「神はどこにいるのか」という絶望の声が聞かれる時が、しばしばあります。弟子たちもそうでした。しかし、聖書は言います。「神は死んでいない。死を越える命がある」「命の神は、いつでもあなたと共にいる。神の息・神の霊は、あなたの命の内にある」……。私たちの命は、命の源である神様から与えられています。私たちの命、「息（生き）は頂きもの」。他でもないその中に、命の神からの霊、聖霊が共にあり、今日も私たちに働きかけ、私たちを次の歩みへと活かしてくださいます。